

第十四章 滿洲事變ト國際聯盟 (六)

和協委員會構成ニ關スル十九人委員會原案

昭和七年十二月六日カラ九日迄開カレタ聯盟總會ガ、十九人委員會ニ日支事件解決案ノ起草ヲ一任シタノハ周知ノコトデアルガ、同委員會ハ起草委員ヲ指名シテ考案ヲ練ラシメ、漸ク成案ヲ得テ十二月十五日之ヲ我方ニ内示シタ、此案ハ爾後折衝ノ根幹ヲ爲スモノデアルカラ、其全文ヲ左ニ譯載ス。

決議案 其一

總會ハ

- 一、規約第十五條ノ條項ニ依リ其第一義務ハ、紛争ノ解決ヲ齎サンガ爲メ努力スルニ在ルコト、從ツテ差當リ紛争ノ事實及之ニ關スル勸告ヲ記載セル報告書ヲ作成スルノ任務ヲ有セザルコトヲ認メ。
- 二、一九三二年三月十一日ノ總會決議ヲ以テ、紛争解決ニ關スル國際聯盟ノ態度ヲ決定セル原則ヲ樹立シタルコトヲ想起シ、
- 三、此種解決ニ際シテハ國際聯盟規約、巴里不戰條約及九國條約ノ規定ガ尊重セラルベキコトヲ確認ス。
- 四、調査委員會報告書第九章ニ掲ゲラレタル原則ヲ基礎トシ、又同報告書第十章ニ記サレタル提言ヲ參照シ、解決ニ到達センガ爲メ當事國ト協力シテ商議ヲ行フ任務ヲ有スル一委員會ヲ設クルコトヲ決議ス。

五、該委員會ヲ構成スル爲メ、十九國特別委員會ニ代表セラレタル聯盟國ヲ指定ス。

六、米合衆國及蘇聯邦ガ商議參加ヲ受諾スルノ望マシキヲ思ヒ、右ノ商議ニ參加スル様米合衆國及蘇聯邦政府ヲ招請スルノ任務ヲ、該委員會ニ委嘱ス。

七、委員會ニ對シ其使命ヲ達成スル爲メ、必要ト思惟スル方法ヲ講ズルノ權能ヲ賦與ス。

八、委員會ニ對シ一九三三年三月一日迄ニ、其經過ヲ報告センコトヲ要求ス。

九、委員會ハ兩當事國ノ同意ヲ得テ、一九三二年七月一日ノ總會決議中ニ言及セラレタル期限ヲ決定スルノ權能ヲ有スベシ。兩當事國ガ斯クノ如キ期間ニ關シ合意ニ達シ得ザルトキハ、委員會ハ總會ニ對シ本問題ニ付其報告ヲ提出スルト同時ニ、提案ヲ爲スベシ。

十、總會ハ其會期ヲ繼續シ、議長必要ト認ムルトキハ、直ニ之ヲ召集スルコトヲ得。

決議案 其二

總會ハ一九三一年十二月十日ノ理事會決議ニ依リ設置サレタル調査委員會ガ、國際聯盟ニ對シ貴重ナル協力ヲ與ヘタルコトヲ感謝シ、其報告ガ至誠且ツ公平ナル業績ノ一實例トナルベキコトヲ宣言ス。

理由書

一、總會ハ十二月九日ノ決議ニ於テ、特別委員會ニ左記ヲ委嘱セリ。

(一)、調査委員會ノ報告書、當事國ノ意見書及如何ナル形式ニヨリテ爲サレタルヲ問ハズ、總會ニ於テ表示セラレタル、諸種ノ意見及提言ヲ研究スルコト。

(二)、一九三二年二月十九日ノ理事會決議ニ依リ、總會ニ附託サレタル紛争ヲ解決センガ爲メ、提案ヲ作成スルコト。

(三)、出來得ル限り速ニ、此等提案ヲ總會ニ提出スルコト。

二、若シ委員會ニシテ總會ニ對シ、事件ノ描寫及一般情勢ニ關スル認識ヲ提示スルヲ要スルニ於テハ、右記述ニ必要ナル一切ノ資料ハ、調査委員會報告書ノ最初ノ八章中ニ之ヲ發見スルヲ得ベシ、蓋シ右報告書ハ特別委員會ノ意見ニ依レバ、主要事項ニ關シ權衡ヲ得且ツ公平ニシテ、完全ナル記述ナルヲ以テナリ。

三、然ルニ右調書作成ハ未ダ其時期ニアラズ、總會ハ規約第十五條第三項ニ從ヒ、和協手段ニ依リテ紛争ノ解決ヲ達成スル爲メ、第一ニ努力スルヲ要ス、若シ此努力ガ成功セル時ハ、總會ハ適當ト思惟スル事實ヲ掲ゲタル調書ヲ公表スベク、若シ失敗ニ終ル時ハ、同條第四項ニ依リ紛争事實ノ報告書及之ニ關スル勸告ヲ作成スルハ總會ノ義務ナリトス。

四、第十五條第三項ニ基ク努力ガ繼續セラルル限り、規約中ニ豫見サレタル各種案件ハ付總會ノ有スル責任感ハ、總會ヲシテ格別ノ留保ヲ維持スルヲ餘儀ナクセシム、仍テ本特別委員會ハ本日總會ニ提示スル決議案ニ於テ、和協ヲ目的トスル提案ヲ爲スニ止メタリ。

五、三月十一日ノ總會決議ニ依リ、特別委員會ハ當事國ト共同シテ、紛争解決ノ途ヲ開クニ努ムベキコトヲ委任セラレタリ。他方米合衆國及蘇聯邦ガ當事國代表者ノ協力ヲ以テスル交渉ニ參加スルハ望マシキコトナルヲ以テ、右兩國政府ノ商議參加方招請ヲ茲ニ提議シタリ。

六、誤解ヲ避クル爲メ、且ツ非聯盟國タル二國ノ協力ニ依リ現在ノ階程ニ於テ企圖シ居ル所ハ、單ニ和協ニ依ル解決交渉ナルコトヲ明瞭ナラシメンガ爲メ、特別委員會ハ同委員會モ此目的ノ爲メニ商議ヲ爲ス任務ヲ有スル新タナル委員會ト看做サレ、又右資格ニ於テ米合衆國及蘇聯邦ノ兩政府ヲ、右會合ニ參加センコトヲ招請スルノ權能ヲ與ヘラレンコトヲ提言ス。

七、交渉委員會ハ其使命執行ノ爲メニ必要ナル一切ノ權能ヲ有スベシ、就中該委員會ハ専門家ノ意見ヲ徵スルコトヲ得、又必要ト認ムル場合ニハ、一若クハ數多ノ分科會又ハ一人若クハ多數ノ特種權威者ニ其權能ノ一部ヲ委託スルコトヲ得ベシ。

八、交渉委員會ノ委員ハ、法的關係ニ付テハ一九三二年三月十一日ノ總會決議第一部及第二部ヲ、又事實關係ニ付テハ調査委員會報告書最初ノ八章ノ叙述ヲ指針トスベク、次デ考慮セラルベキ解決ニ關シテハ、調査委員會報告書第十章ノ提言ヲ參照シ、同報告書第九章記載諸原則ヲ基礎トシテ、之ヲ求ムベキモノトス。

九、右ニ關シ十九人委員會ハ、本紛争ノ特性タル特異ナル環境ニ於テハ、單ニ一九三一年九月前ノ情態ニ復歸スルコトハ、恒久的解決ヲ保障スルニ十分ナラズ、又滿洲ニ於ケル現制度ノ維持及承認モ、解決ト看做シ得ザルモノト思考ス。

以上ハ十九人委員會ノ作ツタ原案デアル、十二月八日ノ總會デ問題ト成ツタ「チエツコスロヴァキヤ」、西班牙「アイランド」瑞典四國決議案ノ様ニ、紛争解決ノ基礎原則トシテ、日本ノ對滿行動ハ自衛手段ト認メ

得ストカ、滿洲新政府ハ日本軍ノ存在ニ依ツテ實現シタモノデアルトカ、乃至滿洲國ノ承認ハ現行國際義務ト兩立セスト云フガ如キコトヲ露骨ニ掲ゲテ居ヌ點丈ケ見レバ、餘程緩和サレタ觀ガアルガ、決議案及理由書ヲ詳讀スレバ結局大差ナキヲ知ルコトガ出來ル、殊ニ十九人委員會ヲ其儘存置シテ、之ニ和協委員會ノ新名稱ヲ與ヘタ如キハ、餘リニ兒戲ニ類シタ仕打デ、其不眞面目サノ一班ガ窺ハレル。蓋シ十九人委員會ハ構成ノ最初ヨリ我國抗議ノ目標デ、又其委員選任ニ纏ハル經緯ハ赤裸々ニ反日色彩ヲ映寫シテ居ルカラ、彼等ト雖モ帝國ニ對スル此挑發機構ヲ活動ノ中心ヨリ遠ザルコトガ、我感情ノ融和ニ資スル所以デアルコトハ夙ニ了解セルモ、サレバトテ十九人委員會ヲ解散スルガ如キハ、小國側ノ自負心到底之ヲ許サヌ、此兩思想ノ組ミ合セガ即チ本案デアアルガ、斯カル見易キ畏ニ掛カル程日本ハ幼稚デハナイ。

米蘇參加問題

更ニ之ヲ解剖觀察スレバ、本案ハ相異ナル二思潮ノ合流デ、其一ハ所謂純理派ノ懷抱シテ居ル所信ヘノ邁進換言スレバ事件ノ本質モ亦其波及スル影響モ全然考慮ニ容レズ、單純ニ彼等ノ見テ以テ異分子トスル帝國ノ擡頭ヲ、虛喝ニ依リテ抑壓セントスル策動、其二ハ東亞ニ於ケル帝國ノ地位ト事件ノ真相トヲ理解スル大國ノ考察、即チ事件ノ急速解決ハ到底其望ナク却テ事態惡化ヲ招致スルカラ、籍スニ時ヲ以テスルノガ萬全デアルトノ見解デ、此兩思潮ノ對峙ハ理由書ヲ一讀スレバ自ラ明瞭デアアル。我國トシテハ無論第二ノ思潮ヲ支持シ、之ガ實行ノ障害トナルベキ一切ヲ芟除スルニアル、若シ之ガ出來レバ茲ニ初メテ折合ガ付キ得ルノデ

和協委員會ノ構成及其權限等ニ關スル內協議ニ於テ、專ラ之ニ向ツテ努力シタノデアアルガ、蘇聯ハ兎モ角モ米國ノ和協委員會參加ハ英國ノ頗ル重キヲ置ク所デ、ソシテ蘇聯ノ不參加ハ殆ンド確實デアッタノニ反シ、米國ハ寧ロ進ンデ參加セントスル模様ニ見受ケタ。此事ハ既ニ十二月八日「カツセル」國務次官カラ我齋藤代理大使ニ夫レトナク表明サレタガ、我國ハ何等ノ義務ヲモ負フヲ要セヌ非聯盟國ガ事件ニ容喙スルノ不合理ヲ指摘シ、最初ヨリ米國ノ參加ニ反對ノ態度ヲ執ツタ。然ラバ何故ニ英國ハ米國ノ參加ヲ重視シタカ、其意中ハ思フニ責任分擔者ヲ求メントスル用意デアッタ様ニ見エル。

右ニ關シ十二月十日「サイモン」外相ガ松平大使ニ語ツタ一節ハ左ノ通りデアアル。既ニ總會ノ演說其他デ御承知ノ通り、自分ハ出來ル丈ケ和協ノ問題ト他ノ問題トヲ切り離シ、專ラ和協ニ力ヲ盡ス方針デ進ミ居ルガ、之ニ反シテ小國側ハ和協ノ問題ト過去ノ事實ノ判斷ノ問題トヲ同一ニ取扱ヒ寧ロ後者ニ重キヲ置カントスル傾向ガアル、自分ハ斯カルコトナキ様專ラ第十五條第三項丈ケデ進ミタク小國側說得ニ努メテ居ルガ、自分ノ考デハ右目的ヲ達スル爲メ、米國ヲ十九人委員會ニ入レ、和協ニ精進スルノガ事宜ニ適スト思フ、若シ米ヲ加ヘヌニ於テハ彼ハ圈外ニ立ツテ單ニ批評ノミヲ爲スコトナリ、和協ノ目的達成ノ爲メ甚ダ都合惡シク、仍テ此際兩國ヲ參加サセテ一所ニ働カスノガ得策デアアル、固ヨリ米露ハ和協ノ目的ノ爲メニノミ參加サセルモノデ、他ノ目的ノ爲メデハ無イ、一度招請シタ後日本ノ反對ヲ受ケテハ極メテ「オートワアド」ノコトトナリ、米國モ憤慨スルダロウカラ、日本政府ノ意嚮ヲ豫メ承知シタイ。「サイモン」外相ハ在京英國大使カラモ同様ノ申入ヲサセタガ、同外相ハ更ニ松平大使ニ對シ、和協委員會

ハ壽府デ開カレルノデアルガ、其構成ハ上海事件ノ時ノ例ニ倣ヒ、紛争ニ對シテ認識ヲ有スル極メテ少數ノ者丈ケトシ、之ニ米蘇ノ代表者ヲ加ヘタク、總會モ多分異議ナイコトト思フト述べ、我方ノ同意ヲ求メタ。壽府ニ在ル我々ハ理論上ハ兎モ角、若シ米蘇ノ參加ガ和協委員會ノ構成、從ツテ其工作ヲ容易ニスル可能性ガアリ、英佛等並ニ聯盟事務局長ノ考ヘテ居ル如ク同委員會ヲ二三年間眠ラセテ事態ヲ靜觀スルニ資シ、其實行ノ見透シガ付ケハ、強チ之ニ反對スルニ及バヌト考ヘ、此意見ヲ東京ニ電報シタガ、十二月十三日ノ閣議ハ之ヲ一蹴シ、其決定ニ基イテ内田外相ハ同日英國大使ニ左ノ通告ヲシタ。

米國及蘇聯ニ對シ和協委員會參加招請ヲ爲シ、聯盟國ノ有スル責任ハ一モ之ヲ負擔スルコトナクシテ、聯盟ノ討議ニ是等非聯盟國ヲ參加セシメントスルノ提案ニ對シ、日本國政府ハ單ニ法律上及理論上ノ異議ノミナラズ、實際上ノ重要事項トシテ、深甚ナル疑問ヲ懷クモノナリ、十九人委員會ニ對スル日本ノ態度ハ既ニ閣下ノ知悉セラルル通りナルガ、更ニ此二國參加ノ能否ニ關シ、委員會ノ性質及權限モ知ラズ、又米蘇ト聯盟規約トノ關係モ明カナラザルニ當リ、豫メ同意ヲ與フルガ如キハ、其極メテ困難トスル所ナリ。右ニ關シ内田外相ハ我々ニ對シテ左ノ如キ説明ヲ與ヘタ。

一、我方ニ於テ米蘇ノ和協委員會參加ニ同意シ得ザルハ

(イ)米蘇參加ノ結果該委員會ノ權威ヲ増シ、法理論ハ何レニモアレ實際上、全世界ヲ代表スルモノナルカノ印象ヲ外間ニ與フルニ至ルベク、從ツテ我方モ米蘇ヲ加ヘタル委員會ノ成果ニ反對スル場合世界の影響ハ、此等ヲ加ヘザル場合ヨリモ遙カニ大ナルベキコト。

(ロ)聯盟ノ小國カ動モスレバ過激ナル言動ニ出ヅルハ、一旦聯盟ト日本トガ正面衝突ヲ爲スコトアルモ、此等小國ハ實際ニ於テ何等ノ責任モ負ハス、即チ單ニ聯盟國トシテノ權利ヲ行使スルノミニシテ、事實上其義務ヲ分擔セザル自由ナル立場ニ在ルガ爲メナル處、米蘇ニシテ聯盟國タルノ義務ヲ分擔スルコトナクシテ和協委員會ニ參加セムカ、其言動ハ必ズヤ前記小國側ト同様ノ傾向ヲ帶ブルノ虞アルノミナラズ、米ノ委員會參加ノ結果、所謂滿洲國不承認ノ主義ハ、一段濃厚ナラザルヲ得ザルベク、又蘇ノ參加ノ結果ハ同國最近ノ態度ニ鑑ミ、我方ニ有利ナラザル懸念アリ、何レニシテモ米蘇ノ言動ノ及ボス影響ハ小國側ノ夫レノ比ニアラザルコトノ二點ニ存スル次第ナリ。

二、固ヨリ我方ハ確固タル既定方針ノモトニ、何時如何ナル場合ニ於テモ、其主張ヲ枉ゲザル覺悟ヲ有スルモノナルモ、而モ能フ限り有利ナル國際環境ヲ保持スルニ努ムベキハ申迄モナキ儀ニシテ、前記ノ考慮ニ基キ、此際米蘇ノ參加ヲ阻止スルニ努ムルコト肝要ト存ズ。

三、將又米蘇ヲ諮問名義ニテ招請スルカ、又ハ所謂「オブサーバー」トシテ參加セシムルコトトセバ可ナルヤノ主張アルモ、當方トシテハ米蘇參加形式ノ如何ニ拘ラズ、實際問題トシテハ前記一ノ(イ)ノ點ハ何等ノ變リナキノミナラズ、米蘇ガ單純ナル「オブサーバー」等トシテ參加スル結果、彼等ノ言動ニ對スル前記一ノ(ロ)ノ懸念、益々深メラルル次第ニシテ、我方ニ於テハ米蘇ヲ如何ナル形式ヲ以テ參加セシメムトスル案タルヲ問ハズ、其當初殊ニ其參加ト否トノ態度決セザル此際、該案ノ成立ヲ阻止シ、以テ參加實現ノ結果發生スルコトアルベキ一層不愉快ナル紛議ヲ避クルコト得策ト存ス。

日本修正意見

右ノ如ク米蘇參加問題デ英國ガ我方ト折衝シツツアル間ニ、否寧ロ英國ハ我方ノ態度ニ見極メガ付タノデ、十九人委員會ヲシテ前掲ノ如キ二決議案ト理由書ヲ作ラセ、同委員會カラ之ヲ我々ニ内示シテ來タ、此案ハ英國ノ仄カシタ内容ト大ナル逕庭ガアリ、殊ニ和協委員會ノ構成ニ付テ然ルガ、多分之ハ英國側思惑ノ存スル所デアツタノデアロウ、何レニセヨ此案ヲ受取ツタ我代表部ハ協議會ヲ開イテ其意見ヲ東京ニ電報シ、本省カラノ注文ヲモ加ヘテ、原案ニ左ノ如キ修正ヲシタ。

決議案 其一

三、「及九國條約」ヲ削ル。

四、ヲ左ノ如ク改ム。

現實ノ事態ト調和セシメ得ル限り、調査委員會報告書第九章（第七及第八ノ原則ヲ除ク）ニ掲ゲラレタル原則ヲ考慮ニ置キ、解決ニ到達センガ爲メ當事國間ニ商議開始ノ途ヲ開クニ努力スルノ任務ヲ有スル一委員會ヲ設クルコトヲ決議ス。

五、「十九國特別委員會ニ代表セラレタル」ヲ「支那ニ大ナル利害ヲ有スル」ニ改ム。

六、全部削除。

決議案 其二

「公平ナル」ヲ「苦心ノ」ニ改ム。

理由書

二、末尾「蓋シ右報告書ハ」以下ヲ削ル。

三、末尾「若シ失敗ニ終ル時ハ」以下ヲ削ル。

五、「他方米合衆國」以下ヲ削ル。

六、「非聯盟國タル二國ノ協力ニ依リ」ヲ削除シ、其他前記ノ修正ニ照應スル變更ヲ加フルコト。

八、決議案ノ修正ニ準ジテ必要ナル變更ヲ加フルコト。

九、全部削除。

此修正ハ既述セル帝國主張當然ノ結果ニ過ギヌ故、敢テ説明スル迄モ無イガ、十二月九日ノ總會デ原案ノ起草ヲ委囑サレタ十九人委員會ガ、最初ノ會合ヲシタ十二日ニ、支那ハ東支鐵道紛爭以來斷絶シテ居タ國交ヲ恢復スルノ取極ヲ蘇聯邦ト締結シ、其地歩ヲ有利ナラシメント努メタニ反シ、東京デハ内田外相カラ蘇聯提議ノ不侵略條約ヲ當分締結スル意思ナキコトヲ蘇聯大使ニ通告シタ。同外相ガ斯クノ如キ時機ヲ選ンデ一年以來ノ懸案ニ對シ此通告ヲ爲スニ至ツタ事情ハ、出先ノ我々ニ分ラヌガ、只何ントナク餘リニ潔癖過ギル様な感ジガシ、此際求メテ先方ノ氣ヲ惡クスル措置ニ出タノハ「タクト」ヲ缺テ居ル様ニ思ハレタ。开ハ兎モ角我々ハ前記ノ修正意見ヲ基礎トシ、杉村公使ヲ介シテ「ドラモンド」事務總長ト交渉ヲ進ムル傍 我々自身各委員ヲ個別的ニ訪問シテ、修正ノ趣旨ヲ説明シ其實徹ニ努メタガ、日本ノ欲スル所ハ支那ノ望マヌモノ

デ、又十九人委員會多數ノ空氣ハ反日的デアルカラ、思フ様ニ運バヌノハ已ムヲ得ヌコトデアル。

十九人委員會起草委員會第二案

斯クシテ十二月十七日十九人委員會起草委員會ハ、日本ノ修正意見ヲ參照シテ作り上ゲタト稱スル第二案當方ニ送附シタ。之ヲ前記原案及修正意見ト對照シ 原案ニ加ヘタ改正點ヲ列舉スレバ左ノ通りデアル。

決 議 案 其 一

三、「及九國條約」削除。

四、左ノ如ク改ム。

十九人委員會ハ調査委員會報告書第九章ニ掲ゲラレタル原則ヲ基礎トシ、又同報告書第十章ニ記サレタル提言ヲ參照シ（現實ノ事態ヲ參酌シテ實際的）解決ヲ計ル爲メ、當事國ト協力シテ和協確保ニ努力スルノ任務ヲ有スルコトヲ決議ス。

五、左ノ如ク改ム。

和協ノ實際的工作ノ爲メ、十九人委員會ハ小委員會ヲ設ク、十九人委員會ハ非聯盟國ノ代表者ヲ此工作ニ參加セシムル爲メ招請スルコトヲ得。

六、削除。

八、（新七）左ノ如ク改ム。

總會ハ小委員會ニ對シ、十九人委員會ガ一九三三年三月一日以前總會ニ報告ヲ爲シ得ル様、十九人委員會ニ其事業ヲ知ラシメンコトヲ要請ス。

理 由 書

二、「（一切ノ資料ハ）ノ「一切」ヲ削リ」「最初ノ八章」ノ次ニ「及兩當事國意見書」ヲ加フ。

五、「商議參加方」ヲ「和協工作ニ參加方」ニ改ム。

六、「同委員會ガ此目的ノ爲メニ」以下「招請スルノ」中間ヲ左ノ如ク修正ス。

和協ニ依リテ解決ヲ求ムルノ任務ヲ有スル小委員會ヲ設クルコト、及米合衆國及蘇聯邦ノ兩政府ヲ、此委員會ニ參加セシムルコトヲ

七、「交渉委員會」ヲ「和協委員」ニ「一部ヲ委託スル」ヲ「全部又ハ一部ヲ委託スル」ニ改ム。

八、「交渉委員會」ヲ「和協委員會」ニ「總會決議第一部及第二部」ヲ「總會決議ノ諸原則」ニ改メ「事實關係ニ付テハ」ノ次ニ「兩當事國意見書審査ノ後」ヲ加フ。

九、原案削除ノ場合ニハ、左ノ新項ヲ以テ之ニ代ユ。

最後ノ決定ハ總會之ヲ爲スモノトス、此決定ハ滿洲ニ於ケル現制度ニ關スル諸問題ヲ解決スベク、規約第十條ト合致スルヲ要ス、加之此決定アル迄聯盟各國ハ最終解決ニ障害ヲ及ボス虞アル如何ナル手段ヲモ執ラザルベシ。（次デ出席ノ各員ハ理由書ノ最後項ニ鑑ミ、總會ノ決定アル迄滿洲ノ現制度ヲ承認セザルベキコトヲ、各自ノ資格ニテ宣言スルモノトス）

以上ノ内決議案其一ノ四及理由書ニノ括弧内ハ、十九委員會起草委員會が未定トシテ之ヲ掲ゲタモノデア
ルガ、決議案其一ノ四ニ關シ「ドラモンド」事務總長ハ「解決」ノ前ニ「實際的」ヲ加へ、之ニ依リテ我方
要求「現實ノ事態ト調和セシメ得ル限り」ヲ撤回サセント欲シタノデアアル。本省カラ後ニ異存ヲ云フテ來タ
ガ、我々ハ其責任デ「ト調和セシメ得ル限り」ヲ「參酌シテ」ニ改メ「實際的」ニ代ヘタ方が遙カニ得策ダ
ト考ヘ、斯ク提議シタノデアアル。起草委員會ハ之ヲ其儘未定トシテ殘シタガ、十二月十八日事務總長ハ杉村
公使ニ對シ我方ノ意見ヲ容ルルコトヲ言明シ、同時ニ「又同報告書第十章ニ記サレタル提言ヲ參照シ」ヲ削
ルコトニモ同意シタ。然シ之ハ寧ロ末節デ、根本問題ハ委員會ノ權限デアアル。帝國ノ要求スル所ハ事件解決
ノ爲メ日支兩國間ニ商議開始ノ途ヲ講ズル丈ケニ委員會ノ使命ヲ局限シ、一度ビ兩國ノ間ニ商議ガ開カレタ
以上、之ヲ善導シテ解決ヲ求ムルノハ、專ラ兩當事國委員ノ責任デ、此交渉ニ局外者ノ關與容喙ハ決シテ許
サヌ。滿洲問題ノ取扱ハ到底上海事件ノ夫レト軌ヲ一ニスルコトガ出來スト云フ建前デアアルカラ、聯盟側ガ
委員會ノ權限ヲ日支直接交渉ノ地均シ丈ケニ留メル決心ノ附カヌ限り、話ハ纏マラス。帝國ノ此態度ハ徒ラ
ニ横車ヲ押シテ居ルノデハナイ。日露戰爭以來日本ハ滿洲ニ關シテ第三國ノ容喙ヲ常ニ拒否シテ來タ。之ガ
爲メ帝國ハ三度モ露國ト協約ヲ結び、相携テ他國ノ關與ヲ排除スルニ努メタノデアアル。ソシテ其對照ハ常ニ
英國又ハ米國デアツタノダカラ、和協委員會ニ米國ガ加ツテ英國ト共同「フロント」ヲ作ル様ナ配合ハ到底
承諾出來ヌ。又九月十八日ノ事件以來聯盟ガ傍觀的態度ヲ執ツテ居タラ、事件ハ夙ニ解決サレタノデ、此事
ハ如何ナル聯盟人ニモ自覺シテ居ルニ相異ナイ。殊ニ昭和七年十二月十六日在北平矢野參事官ガ歸朝挨拶ノ

爲メ漢口デ蔣介石ト會見シテ歸ツテ來タ張學良ヲ訪問シタ時、學良ガ日支事件ハ今日支那ニ取リ全然行キ詰
ツテ居ル、聯盟ニ此問題ヲ提起シテ居ルノハ對内的必要ニ逼マラレテノ爲メデ、國民ニ對スル一種ノ鎮靜劑
ニ過ギヌ、若シ此際日本カラ支那ト何等話合ヲ開始シ、日支關係ヲ常道ニ復セントノ希望ガ出レバ、蔣介石
ハ全責任ヲ以テ之ニ當ル決心ガアル。ト語ツタコトハ、和協委員會ノ權限問題乃至米蘇ノ同委員會參加問題
ニ關シテ我方ノ爲セル主張ノ正鵠ナコトヲ裏書スルモノデアアル。要ハ聯盟ニ押付ケラレテ已ムナク日支直接
交渉ヲ開クノダトノ容態ヲ支那人ニ整ヘサセルノガ、東洋平和ノ爲メ又國際聯盟ノ使命上、最モ肝要ノ事
柄ナノデ、和協委員會ヲ二三年間眠ラセテ置ク考案ガ決議原案ニ依ツテ覆サレタ今日、帝國ノ主張ハ頗ル當
然ノ成行デアアル。和協委員會ノ權限問題ヲ除ケバ決議案其一ノ五前段ハ大凡ソ我方ノ要求ヲ容レタモノデア
ルガ、然ラバ何故ニ日本ノ提案通り「支那ニ大ナル利害ヲ有スル」ト規定スルヲ避ケタカト云フニ、之ハ從
來日支事件ノ爲メノ臨時總會及十九人委員會議長ヲシテ居タ「イマンス」氏ニ敬意ヲ表スル爲メト、同時
ニ氏ヲシテ小國ヲ代表サセル意味デ、氏ニ議席ヲ與ヘントスル魂膽カラ出デタモノダト云フコトデアアル、而
シテ此項後段ハ原案第六項ヲ日本ノ要求通り削除シテ體裁ヲ整ヘル爲メノ「カムフラージュ」デ、實際ニハ
容態ヲ變ヘタ第六項ニ外ナラヌノミナラズ、理由書ハ殆ンド原案其儘故、日本ガ其主張ヲ緩和セザル限り、
到底妥協ノ餘地ハ無イ。

理由書ニノ原案「蓋シ右報告書ハ」以下ノ削除ニ起草委員會ガ難色アル所以ハ、最初十九人委員會デ急進派
ノ連中ガ、規約第十五條第三項ニ依ツテ調書ヲ作ル際ニハ、報告書最初ノ八章ヲ其儘之ニ充當スベキダトノ

無責任極ハマル暴論ヲ爲シ、其後曲折ヲ經テ此項ノ形デ納マツタ經緯ガアル爲メダト思フ。尙ホ起草委員會ガ保存シタ理由書三ノ末尾「若シ失敗ニ終ル時ハ」以下ニ關シ、事務總長ハ十二月十八日會談ノ際、我方ノ注文通り之ガ削除ニ異存ナシト杉村公使ニ述ベテ居ル。

理由書九ノ新案ハ改善ニ非ズシテ改惡デアル、若シ十九人委員會ガ日本ニ此案ヲ承諾サセ得ルモノト眞面目ニ考ヘテ居タラ、全然狂氣ノ沙汰デ、若シ其不承諾ヲ知リナガラ之ヲ書タノデアルナラ、云フ迄モナク帝國ニ對スル挑戰ニ外ナラヌ、信賴スベキ筋カラ聞イタ所ニ依ルト、此項原案ノ削除ガ十九人委員會デ問題ト成ツタ時佛國ノ「マツシグリー」氏ハ反對意見ヲ述ベ、論議ノ末原案ニ代ルモノトシテ出來上ツタノガ即チ新案デアルガ、本案末尾各國代表宣言ニ關スル考案ハ「マ」氏ノ熱心ナ主張ニ依ツテ加ヘラレタモノダトノコトダ。筆者ハ巴里講和會議以來十有餘年間ノ友人タル氏、而カモ筆者ノ任國ノ代表者トシテノ氏ガ、斯クノ如ク反日ノ急先鋒ヲ務タノヲ聞テ甚ダ心外ニ感ジタガ、是レニハ當時ノ佛國政情ヲ檢討スル必要ガアル。「エリオ」氏ハ急進社會黨ノ領袖デハアルガ、日支事件ニ對スル考ノ持方ガ相當慎重デ、其一班ハ既ニ記シタ通りデアル。然ルニ昭和七年十二月中旬「エリオ」內閣倒レ同月十九日「ポール・ボンクール」氏其後ヲ襲フタ。氏ハ當時無所屬デハアルガ社會黨出身デ、其氣分モ左傾シテ居ル。「ボ」氏ハ同時ニ外相ヲ兼ネ肱股トシテ外務政務次官ノ要職ヲ當ガツタ。「ビュール・コット」氏ハ有名ナ純理派デアリ、之ニ支那禮讀者「レジエー」氏ノ外務總務長官トシテ配屬サレテ居ル、ノミナラズ同年秋ノ聯盟定時總會デ事務局幹部ノ國籍配合ガ改正サレタ結果辭任ヲ餘儀ナクサレタ情報部長「コメール」氏ハ「ボンクール」首相直屬ノ宣傳班長ニ任命

サレタ、「コ」氏ハ聯盟ニ在ル時カラ折紙付ノ排日家デ「リットン」報告書公表ノ際モ、豫メ日本ニ都合ノ惡イ所丈ケ引拔イタ摘要ヲ作り、公表ト同時ニ之ヲ新聞記者團ニ配布シタ程デアル。兎ニ角當時佛國外務省ノ幹部ハ極端ナ排日家ニ依ツテ堅メラレ、穩健ナ「コスム」亞細亞局長等ハ手モ足モ出ヌ有様デ、筆者ノ工作上尠ナカラヌ不便ヲ感ジタノハ爭フ可ザル事實デアル。

休會中ノ工作折衝

何レニセヨ和協委員會案ハ急ニ話ノ纏マル見込ガ無イノデ、十二月十九日十九人委員會ハ翌昭和八年一月十六日迄休會シ、此間「イマンス」議長及「ドラモンド」事務總長ハ兩當事國ノ代表等ト折衝シ、研究ヲ積ムニ決シタカラ、松岡代表ハ土伊方面ニ旅行シ、筆者ハ十二月二十二日巴里ニ歸ツタガ、我在外使臣ハ此期間ヲ利用シ、帝國ノ主張貫徹ノ爲メ任國政府ノ啓發ニ努メタ。

十二月二十三日杉村公使ガ「ドラモンド」事務總長ニ面會シタ時、同總長ハ聯盟ハ此際焦セツテハイケヌ、起草委員會案ハ餘リ多クノ手傷ヲ負ツタカラ、之ヲ基礎トシテ此上修正ヲ試ミルヨリモ、寧ロ異ツタ見方カラ案ヲ樹テ直ス方ガ良イカト思フト述ベタト云フ事ヲ聞イテ、若シ十九人委員會ノ動キモ斯クノ如クデアツタラ、交渉ハ漸次軌道ニ乗ツテ來ルモノト、多少ノ望ヲ掛ケテ居タ處、在白佐藤大使カラ左記ノ電報ニ接シテ、筆者ハ尠ナカラズ失望シタ。同電文括弧内ノ註ハ電報ヲ讀ミナガラ當時筆者ガ記入シタモノデ、其時ノ興奮氣分ヲ窺フ一端トモ成ルカラ、之ヲ其儘掲ゲルコトニスル。

昭和八年一月三日「イマンス」外相ニ面會、十九人委員會ノ決議案及理由書ニ關シ貴電ノ趣旨ニ基キ我方修正意見詳細申入レタリ、同外相ハ熱心ニ本使ノ説明ヲ聴取セル後、自分一個ノ意見トシテ公正ナル立場ヨリ見タル觀察ヲ述ブベシト斷ハリ、左ノ如キ意見ヲ開陳セリ。

一、決議案第三項中九國條約ハ極東ニ關スル主要條約ノ一ナルニ付テハ、之ヲ維持スルコト依然必要ト考フ。(起草委員會削除ニ同意セリ、當時「イマンス」氏ハ壽府ニ在ラズ「カルトン・ド・ヅキアール」氏代理セルガ、氏ノ同意ニ反對ナル次第ニヤ)

二、同條第四項日支直接交渉ニ關スル日本政府ノ御意嚮モ然ル事ナガラ、少クトモ支那ハ依然トシテ直接交渉ヲ拒絕シ居リ(支那ハ聯盟ノ支持ヲ見越シテ、拒絕シ居ルニ過ギヌ)此際聯盟ハ單ニ直接交渉ヲ兩當事國ニ德憑スルノミニテ、自カラハ手ヲ引キ交渉ノ推移ヲ傍觀スベシトスルハ、聯盟ノ職責ニ反スト云ハザルヲ得ズ。(聯盟ノ大職責ハ平和ノ確立ニアリ、斯クノ如キ當面ノ小面目ニ捉ハレ、根本義ヲ忘ルルハ矛盾ニシテ本末顛倒ナリ)又理由書第三項ノ後段——第十五條第四項適用ノ件——抹殺ニ關スル日本政府ノ意見ハ諒解シ難ク、自分トシテハ右抹殺ヲ不公平ト考フルモノニシテ、規約ニ明記シ居ル聯盟ノ義務ヲ再記シタルニ止マリ、三月十一日ノ總會決議ニモ既ニ記載シアル事項ナルニ付、之ヲ削除スルコト困難ナルノミナラズ(云ハナクテモ當然ノコト故、抹殺セントスルモノニテ、本項末段ノ文句ハ一種ノ脅迫ナリ、又三月決議ニ在ル以上、之ヲ繰返ス必要何處ニアリヤ、何レニセヨ事務總長ハ既ニ削除ニ同意ス「イマンス」議長之ヲ知ラザル等ナシ)聯盟トシテ單ニ日支兩國ノ直接交渉ニ一任スベキモノニ非ズシテ、規約ニ

依リ與ヘラレタル自己ノ使命ハ、之ヲ忠實ニ果サザルヲ得ズト考フ。(使命ヲ了解セズシテ事ニ處セントスレバ、却テ反對ノ結果ヲ招來ス、即チ忠實ニアラズシテ、不忠實ニ歸スベシ、他ニ方法ヲ見出スコト肝要ナリ)

三、米蘇兩非聯盟國招請ノ件ニ付テハ、自分ハ和協委員會ノ「スタビリチー」ヲ保ツ上ニ於テ、望マシキコトト考ヘ居タリ。蘇聯邦ノ如キニ於テモ既ニ軍縮會議其他重要ナル聯盟ノ會議ニ參列シ、共同ノ目的ニ向ツテ進マントシ居ル此際、之ヲ和協委員會ニ招請スルハ強チ理由ナキニ非ズ(是レハ顧ミテ他ヲ言フノ類ナリ、夫レ程蘇聯ヲ可愛ガルナラ、白耳義ハ先ヅ蘇聯ヲ正式承認シテハ如何)殊ニ滿洲ニ於ケル日蘇兩國ノ政治經濟的關係妥結ニ達セントスル狀況ナルニ於テハ——本使ハ斯ク説明セリ——蘇聯邦ノ參加ハ日本ニトリテ邪魔トナラザルベク(餘計ナコトナリ、白耳義ノ如ク歐洲ノ均勢上漸ク獨立ヲ維持シツツアル國ガ、斯クノ如キ差出ガマシキコトヲ、若シ歐洲ノ大國使臣ニ口外セバ、其結果如何)聯盟側ヨリ見レバ非聯盟國ノ參加ハ國際協調ノ見地ヨリ兎ニ角ク望マシキ次第ナリ(國際協調ノ見地ヨリスレバ、各國先ヅ蘇聯邦ヲ承認スベキモノナリ、十九人委員會諸國中之ヲ爲セル國幾何アリヤ)唯米國ノ參加ガ日本國民ニ依リ一種ノ脅威ト考ヘラルルハ、或ハ已ムヲ得ズトスルモ(米ノ參加ガ脅威ナルニハ非ズ、歷史上日本反威ヲ有スルナリ)然モ米蘇兩國ノ如キ大國ハ和協委員會ニ參加セザル場合ニ於テモ、當事國ノ一又ハ双方ニ對シ脅威ヲ加ヘントセバ、必ズシモ其目的ヲ達スルコト不可能ニアラズ(政策ノ問題ハ日本獨リ之ヲ決スベク、渺タル白國ノ干渉ヲ許サズ、況ンヤ一國外務大臣ノ言辭トシテ、米蘇若シ欲スレバ帝國ヲ脅威シ

得ト云フニ至ツテハ、帝國ニ對スル是レ以上ノ侮辱ナク、之ヲ其儘聞流スコトハ、歐洲大國ノ使臣ナラバ到底爲シ得ザル所ナリ) 果シテ然ラバ寧ロ之ヲ加入セシメ、充分ニ其意見ヲ開陳スルノ機會ヲ與フルニ如カズト考ヘラル。

四、決議案第五項日本側修正ノ如キ限局サレタル人數ノ委員會設置ノ件ハ、聯盟側ニ於テハ到底承諾ノ餘地ナカルベシ(果シテ然ラバ起草委員會案ハ何ヲ意味スルヤ) 十九人委員會ハ總會ノ分身ニシテ、其與ヘラレタル權限ニ依リ日支問題解決ニ當ラザルヲ得ズ、況ンヤ理由書第七項ニ於テ或ハ小委員會ヲ設ケ或ハ特別ノ人材ニ協力ヲ求ムル如キ餘裕ヲ存シ居ルニ於テ、尙ホ更ラ十九人委員會自ラ事ニ當ラントスルハ不合理ト云フ可ラズ。(理論上日本ハ十九人委員會ヲ認メシコトナシ、又實際上十九人委員會ノ空氣ヲ喜バザルモノナリ、「イマンス」議長ガ前記ノ言ヲ爲セルハ、新案ニ依ル小委員會ニ於テ自分獨リ小國代表ナルベキヲ豫知シ、其責任ノ重キヲ感ジテ之ヲ回避センガ爲メノ用意ニハ非ザルカ)

五、理由書末尾削除ノ件ハ、十九人委員會ニ於テ殆ンド承諾ノ餘地ナキコト多言ヲ要セズ。(何故ニ承諾ノ餘地ナキヤ、此言辭餘リニ暴慢ナリ)

之ヲ要スルニ自分ノ見ル所ニ依レバ、日本側修正ハ十九人委員會原案ニ對シ重要ナル點ニ於テ意見ノ相違ヲ明示スルモノニシテ、自分ハ妥協ノ餘地ヲ見出スコト殆ンド不可能ニ非ズヤト悲觀シ居レリ、自分ヲシテ素直ニ言ハシムレバ、日本ハ軍事上、財政經濟上共ニ堂々タル世界ノ大國ニシテ、其當面セル國際的紛爭ニ於テモ、自己ノ世界的地位上、自ラ進ンデ妥結ノ道ヲ講ジ、以テ他ニ範ヲ示ス如キ態度ニ出デラル

ヲ賢トスベシ(妥協ノ道ハ支那ガ講ズベキモノナリ、自衛ノ爲メ行動シタル日本ガ、泣ヲ入ルベキ筋合ニアラズ、此言辭ハ日本ヲ煽テナガラ屈從セヨト云フニ外ナラズ) 事件ガ如何ニ重大ナレバトテ、自己ノ欲スル解決ニ達シ能ハザル故ヲ以テ、總テノ大國ガ聯盟ヲ脱退シ得ベシトセバ、大戰ノ結果漸ク構成ノ緒ニ就キタル國際協調機構ハ一朝ニシテ消滅スベク(日本ノ立場ヲ解セスコト甚ダシ、日本ハ支那ガ排外思想ニ基キ惹起シタル其罪ヲ瀆ハンコトヲ、聯盟ニ要求シ居ルニ過ギズ) スクノ如キハ果シテ全世界ノ平和ニ對スル大國ノ責任上許サルベキモノナリヤ、自分トシテ頗ル疑ナキ能ハズ(「イマンス」外相ハ右ト同一ノ言辭ヲ英國大使ニ弄スルノ勇氣アリヤ) 自分ハ日支ノ双方若クハ一方ニ對シ彼此注告ヲ與ヘントスルモノニ非ザルモ(佐藤大使ニ對シテハ注告以上ノ暴言ヲ擅ニシ居ルニ非ズヤ) 臨時總會議長トシテ日本政府ニ於テモ此際難キヲ忍ビテ紛爭解決ニ努力セラレンコトヲ希望セザルヲ得ズ(矢張り聯盟ニ屈從セヨト云フニ等シ) 支那ハ久シキ以前ヨリ混亂ノ狀態ニアリ、其國內ニ於ケル政治的機構甚シク紊亂セルハ事實ナリト雖モ、滿洲事變以來日本ニ對スル支那人ノ反感ハ高潮ノ極ニ達セリト云フモ過言ニ非ズ。スクノ如キ狀態ヲ繼續セシムルハ終極ニ於テ日本ノ利益ニ非ザルベク、此點日本側ニ於テモ慎重考量セラルルヲ要スベシ(如何ニモ大國宰相氣取ナリ、大國ガ弱少國ニ對シテ用ユル語氣ナリ、大國相互間ニ於テハ如何ナル大宰相タリトモスクノ如キ無禮ノ言辭ヲ弄スル者ナカルベク、若シ之アリシ時ハ、相手國使臣ハ決シテ其儘ニハ濟マサザルベシ)

以上ハ本使ニ於テ日本側ノ主張ヲ出來得ルダケ詳細ニ申入タルニ對スル「イマンス」外相ノ感想ニシテ、

本日ノ會見ニ於テハ同外相ハ明カニ且ツ打明ケテ自己ノ感想ヲ語リタル點、從來會談ノ際トハ大イニ趣ヲ異ニセル如ク感ゼラレタリ。(從來ハ多ク壽府ニ於ケル會見ナルガ故ニ「イマンス」氏モ其國際的地位ヲ反省セルナルベシ、本日ノハ之ニ反シテ自國ニ於テナルガ故ニ、所謂白耳義人根性ヲ赤裸々ニ表ハシ、見榮ヲ切りタルモノナラン、矢張り聯盟本部ヲ「ブルツセル」ニ置カザリシコトノ得策ナリシヲ思ハシム、白國人ノ腦裏ニハ未ダニ領事裁判權撤去交渉ノ際日本裁判所ニ白國人判事ヲ推薦シ、又外交官養成ノ爲メ「ブ」府ニ日本政府ノ留學生ヲ送ラシメシ當時ノ日本ニ關スル觀念殘留シ、現實ノ日本ニ付テハ假令其知識アルモ、求メテ之ヲ理解セザラント欲スルノ感アリ、嘗テ武者小路公使ガ小國ニ諒解ヲ求メ、之ヲ誘導スル爲メノ策動ニ關シ、斯クノ如キハ徒ラニ小國ノ頭ヲ高クシ、我ヲ輕侮スルノ結果ヲ招來スルニ過ギズト慨歎セルヲ想起シ、轉々其正鵠ナルヲ思ハシム、一九一一年余ガ白耳義ニ轉勤セル直前、公式園遊會ノ席上國王ガ我鍋島公使ニ對シ、稅率ノ協定ヲ飽迄拒否スルハ決シテ日本ノ利益ニ非ザルベシト云ハレシト聞キ、之ヲ其儘聞流シテ來タ公使ノ國辱の無策ニ大ニ憤慨シタモノデアルガ、此「イマンス」外相ノ不遜ナル暴言ハ遙カニ右以上デ、白耳義人ハ今以テ「ブリアルモン」將軍ヲ超人視シ、「アントワープ」ノ要塞ヲ難攻不落ト考ヘテ居ルモノカトモ見エル)

臨時總會ノ議長トシテ同時ニ十九人委員會ノ議長タル「イマンス」氏カラ、右ノ如キ意思表示アリシヲ知ツタ筆者ハ、大ナル失望ヲ禁ジ得ナカツタ。會議ヲ主宰スル者ガ斯クノ如キ見解ヲ持ツテ居ルデハ、普通ナラ纏マリノ付クベキ見透ハ皆無デアル、然シ氏從來ノ行動ヲ按ズレバ左程悲觀スルニモ當ラヌカト考ヘ直シ

タ。夫レハ英佛ノ如キ大國カラ注文ガ出レバ、氏ハ簡單ニ之ニ屈從スルヲ例トシタカラデアル。ソハ兎モ角聯盟デ中々羽振ノ良イ「チエツク」ノ「ベネシユ」外相ガ堀田公使ニ述ベタ意見ハ「イマンス」外相ノ夫レトハ雲泥ノ差デ、大ニ要領ヲ得テ居ル。堀田公使ノ會見報告ハ左ノ通りデアル。

一月十日「ベネシユ」外務大臣ニ面會、再ビ我方修正案ニ付懇談シタルガ、同外務大臣ノ意見左ノ通り。

一、第一決議案第三項中ニ九國條約ヲ挿入シタルハ、米國側ノ意嚮ヲ考慮シ英國ガ提議セルモノト記憶スル處、英國ニシテ之ガ削除ニ同意ナラバ、自分ニハ何等異存ナシ。

二、同決議案第四項ノ修正ハ、支那側ニ於テ直接交渉ヲ承諾スルニ於テハ、我々ニ於テ固ヨリ異存アル筈ナシ、然レドモ支那側ガ之ヲ認メザル以上、聯盟トシテ公平ト認ムル原則ニ從ヒ事件解決ノ任ニ當ルハ、規約上ノ義務ナリト確信ス、其場合ニ於テ調査委員會報告書第九章ニ掲グル原則中最重要ナル第七ヲ除外スルコトニ對シテハ、十九人委員會ハ絶對ニ反對ナルベシ、客空同委員會ニ於テ此點ニ付日本ノ修正意見ガ協議セラレタル際、全員ハ之ニ反對ヲ表シタルガ、此態度ハ變更ノ餘地ナシト考フ。

三、米露ノ參加ハ問題ノ根本的解決ニ必要ナリトノ見地ヨリ提議セラレタルモノナルガ、日本ニ於テ之ヲ欲セザルニ於テハ、敢テ固執スルノ理由ナカルベク、日本修正案ヲ承認シ得ベシ。

四、第二決議案及理由説明案第二項ハ、日本側ノ意見ヲ考慮シ適當ノ字句ニ修正スル餘地アルベシト考フ五、理由説明案最後ノ一項ヲ削除スルコトニ對シテハ、十九人委員會トシテ相當議論アルベシト思考スルモ、自分トシテハ格別ノ意見ナシ。

六、聯盟トシテハ支那側ニ於テ直接交渉ヲ承諾セズ聯盟ニ依テ事件ノ解決ヲ求ムル限り、規約ノ明文ニ掲グル原則ニ從ヒ之ニ解決ヲ與フル義務ヲ有スルガ故ニ、滿洲ノ分離ヲ根幹トスル日本ノ政策ト衝突スルハ實ニ已ヲ得ザル所ナルベシ。日本ガ其政策トシテ滿洲國ノ承認ヲ唯一ノ解決方法ナリト主張セラルルニ確乎タル理由アルコトハ、充分ニ了解シタリ。而シテ日本政府ガ聯盟ニ於テ術策ヲ用キズ堂々ト其所信ヲ表明セラレタルハ、大國タル面目ヲ保持セル誠意アル態度トシテ、衷心ヨリ賞讃ノ念ヲ抱クモノナリ。然レドモ不幸ニシテ日本ノ主張ハ聯盟規約ト衝突スルガ爲メ、聯盟ノ支持ヲ國策トスル我々小國トシテハ、之ヲ認諾スルヲ得ザル立場ニ在リ、自分トシテハ日支問題ニ對スル聯盟ノ處置振ニハ大ナル過誤アリタルニアラザルヤヲ疑フモ、今日トナリテハ日本トノ間ニ衝突ノ外途ナキニ至レルモノト考ザルヲ得ズ。右ハ小國ノミナラズ英佛等大國側ニ於テモ同様ノ感想ヲ有スルガ如シ、日本ヲ尊敬スルニ拘ラズ立場ノ相違ヨリ反對ノ態度ヲ執ルコトハ、自分トシテ深ク苦痛トスル所ナリ。日本ハ當然既定ノ方針ヲ遂行セラルルモノト考フル處、不幸ニシテ聯盟トノ間ニ衝突ヲ生ズル場合アリトスルモ、一旦問題ガ聯盟ノ手ヲ離ルルニ至ラバ、自分トシテハ日本ノ政策ニ充分ノ同情ヲ有スルモノナルガ故ニ、何等ノ拘束ナク却テ日本トノ友好關係ノ増進ニ力ヲ盡スコトヲ得ベシト思考ス。

以上ハ最惡ノ場合ヲ豫想セザルヲ得ザル事態ニ立到リタルコトヲ感じ、總テノ外交辭令ヲ棄テ、率直ニ所見ヲ述べタル次第ニ付、切ニ誤解ナキ様希望ス。

(會談中「ベネシユ」外相ノ口吻ヨリ察シ、最近ニ聯盟事務局側ト意見ノ交換ヲ行ヒタルガ如ク感得セラ

レタリ)

筆者ノ任國タル佛蘭西ニ於ケル政局ノ動キ及外務省ノ空氣ハ曩ニ述べタ通りデアル。壽府カラ歸ツタ筆者ハ「ボンクール」新首相兼外相ヲ早速訪問シタガ、之ハ新任祝賀ノ爲メノ禮訪故、餘リ立チ入ツタ話ハ出來ナカッタケレドモ、其際「ボ」氏ハ前内閣ノ政策ヲ踏襲シ、日本トノ親交ヲ一層敦厚ナラシメンコトヲ期スル旨ヲ繰返シ述ブルト同時ニ、何分組閣早々デ未ダ何事モ手ニ着カヌカラ、正月ニ入ツタヲ篤ト意見ノ交換ヲシタイト云ツテ居タガ、其内郷里ニ歸省シ、巴里ニ歸ツテ來タノハ一月八日デアル、然ルニ其十日カラ議會モ開カレルノデ、劈頭提出サルベキ豫算案ト財政案ノ協議ニ多忙ヲ極メ、十二日迄ハ一切外交團ヲ接見セヌコトニ決定シタ。筆者ハ十一日ノ夜汽車デ壽府ニ行ク豫定ダカラ「ボ」氏ニ面會スル機會ガ無い、仍テ新内閣デ聯盟關係一般ヲ掌ルコトニナツタ「コツト」政務次官ノ許ニ、氏ト親交アル伊藤參事官ヲ送り懇談サセタ。「コ」氏ガ純理派デアルコトハ一言シタガ、氏ハ一月五日一部新聞記者ヲ集メ、日支問題ニ對スル佛國從來ノ態度ヲ以テ甚ダ屈辱的ナリトシ、佛國ハ宜シク其信念ニ基キ、正々堂々聯盟精神ノ擁護宣揚ニ努メ、規約第十五條ヲ完全ニ維持セネバナラスト述べタ位デ、翌六日ノ閣議ニ此主義上ノ問題ガ附議サレタガ「サロ」海相ノ反對アリ、現政府モ大體「エリオ」内閣ト同一態度ヲ維持スルニ決シタトノコトデハアルガ、斯クノ如キ次第故「コツト」次官ヲ啓發スルノハ最モ必要ナ工作デアツタ、伊藤參事官ハ詳細我方主張ノ公正ナ所以ヲ説示シタラ、「コ」氏ハ自分モ日支事件ガ例外的性質ヲ有スルコトハ熟知シテ居リ、歷代ノ佛國政府亦之ヲ考慮ニ入レテ措置シ來ツタ。然シナガラ如何ナル政府デモ之ヲ支持スル黨派ノ輿論ヲ無視スルコトハ

不可デ、ソシテ輿論ハ常ニ複雜ナ問題ヲ單純化シテ取扱フ傾向ガアル。右翼各派ハ常ニ支那ハ組織ナキ國家デ聯盟國タル資格ナク、支那ノ無政府狀態ニ直面セル日本ノ行動ハ正當ナリト主張シ來タツタガ、左派ニ屬スル黨派ハ日本モ支那モ規約及不戰條約ヲ遵守スルノ義務ガアル、然ルニ日本側ニハ此等條約ニ違反セル事實アリ、依ツテ佛國政府トシテハ其歐洲政策ノ基礎タル規約ノ違反行爲ヲ是認スルコトハ出來ヌト爲シ、常ニ政府ニ對シテ強硬態度ヲ要求シ來ツタガ、最近ニ於ケル北支ノ形勢ハ更ニ一層之ヲ尖鋭化サセタ。左派ニ依ツテ立ツ現政府ハ此等ノ主張ヲ全然無視スルコトハ困難ダト述ベタノデ、伊藤參事官ハ然ラバ實際問題トシテ、來ルベキ十九人委員會デハ如何ニ措置スル考ナリヤト尋ネタルニ、「コ」氏ハ自分等ハ最後ノ局限迄和解ヲ試ムル用意ガアル、然シ之ガ不成功ニ終ル場合聯盟ノ無力ヲ表明スルコトハ出來ヌカラ、規約第十五條ノ手續ヲ續ケル外ハナイト答ヘ、佛國トシテハ和解ヲ成功サセル爲メ最善ノ努力ヲ爲ス考ヘダト繰返シ述ベタトノコトダ。何レニセヨ佛國ニ餘リ多クノ期待ヲ持チ得ヌ事態ニ置カレタ筆者ハ、頗ル之ヲ遺憾ニ感ジタガ、日本ニ理解アリ事件ニ諒解アル知友、政客、記者等ト出來ル丈ケ接觸シ、對抗策ヲ講ジタ。當時一部同胞ノ間ニ右黨ト提携シテ左派切崩シノ運動ニ着手センコトヲ切ニ提言シタ人モアツタガ、其目標トスル右傾分子ノ主腦ハ政界ニ重キヲ爲スベキ人格者デ無イノミナラズ、當時ノ佛國政局上常道ヲ以テシテハ到底成功スル望ミハナイ、若シ夫レ提言者ノ計畫ヲ鵜呑ニシテ邁進スレバ、單ニ得失相償ハヌ許リデナク、日佛國交ノ大局ニモ累ヲ及ボスコト明カデアルカラ、筆者ハ其提言ニ耳ヲ籍サナカツタガ、彼等ハ後日中傷謗ヲ以テ筆者ニ報ヒタ。其後中央共和黨ノ「ド・タスト」氏中心トナリ、下院議員間ニ日佛會(グループ・フラン

コ・ジャボネー)ヲ設ケ、昭和八年三月中旬ニハ會員七十名程ニ達シ、其中ニハ社會黨議員二名、急進社會黨議員十名モ加ハツテ居ルガ、此會ハ日本ノ事情實相ヲ研究スルヲ目的トシ、政策ノ問題ニハ一切觸レヌ建前デアル。日支事件以前カラ此種ノ會ガ下院ニ出來テ居タラ、假令政策問題ト沒交渉ダトシテモ、日佛ノ諒解ニ貢獻シタコトデアラウガ、當時日本ニ對スル關心ハ佛國政界デ極メテ少ナカツタカラ、此種ノ會ノ成立ハ殆ンド見込ガナカツタ。人或ハ日支事件勃發後早キニ及ンデ之ガ設置ニ努力シナカツタノヲ非難シ、又遲レ馳セナガラ前記提言時ニ此種策動ノ積極的乘出シヲ試ミナカツタコトヲ非議スルガ、實際問題トシテ右黨ガ政權ヲ握ツテ居ル間ハ其必要ガ少ナカツタシ、若シ之ヲ計畫シテモ左黨議員ノ加入ハ殆ンド期待シ得ナカツタデアラウ、況ンヤ左黨ガ議會ニ多數ヲ得テカラ、左黨ヲ主腦トシテ此會ヲ設ケントテモ、之ハ實現性ハナイカラ、右黨ヲ中心トシ左黨議員ノ加入ヲ勸誘スル外ハナイガ、ヨシ政策問題ニ觸レヌコトヲ標榜シテモ當時ノ空氣デハ左黨議員ノ參加ハ先ヅ望マレナカツタシ、假リニ幾人カ加入者ガアツタトシテモ、日支事件ニ何等カノ役割ヲ勤メ得ル會ト成リ得ヌノハ明カデアル。畢竟此會ニ前記ノ如ク些少ナガラ左黨議員ノ加ハツタノハ、聯盟デ日支問題ガ段落ヲ告ゲタ爲メデ、之ニ依ツテ初メテ政策ヲ離レテ日本ヲ研究スル可能性ガ生マレタノダト云フコトヲ見逃シテハナラス。

最後ニ英國トノ交渉ヲ述ブレバ、一月四日在京英國大使ハ本國政府カラノ電報ヲ持參シテ内田外相ヲ訪問シタ。此電報ノ要旨ハ、日本國政府ガ最近壽府代表部ニ送ツタ訓令ハ、十九人委員會ノ到底承諾不可能ナモノノ如ク見エル、聯盟最初ノ任務モ和解ニ依リテ解決ヲ求ムルニ在ルコトヲ體シ、英國委員ハ十九人委員會ニ

於テ又起草委員會ニ於テ常ニ此見地ニ基キテ行動シ、其同僚ノ共鳴ヲ受ケタ、和協委員會ノ構成ハ合理的デ其成立ヲ見テ初メテ總會ハ第十五條第三項ノ命ズル任務ヲ果シ得ルノデアル。壽府デハ遠カラズ協議再開セラルベク、就テハ日本政府ニ於テ右協議ヲ成功ニ導ク爲メ其態度ヲ再考サル様希望ニ堪エヌ、ト云フニアル。右ニ對シ内田外相ハ日本ハ和協委員會ノ成立ヲ歡迎シ其成功ヲ祈ルモノデアルガ、一方滿洲問題ニ對スル帝國ノ主張ハ屢々聲明サレタ通りデ、殊ニ日本ハ滿洲國ノ獨立ニ對シ既ニ承認ヲ與ヘ居ルノミナラズ、同問題ハ日支直接ニ交渉スベキモノデ、第三者ノ關與ヲ許サヌコトハ帝國政府ノ確定方針ナルヲ告ゲタ處、英國大使ハ貴説ハ充分了解シテ居ル、之ニ付テ彼此議論スル譯デハ無イノデ、右二點ヲ「エキスクルド」セヌ何等カノ「フオーミュラー」ヲ案出シ、結局ニ於テ日支直接交渉ニ持チ行ク様ニハナラヌカト問フタカラ外相ハ若シ我主張ヲ「コムミット」シ又ハ「コムプロマイス」セヌ何等カノ妙案ガアレバ、之ヲ勘考スルヲ辭セヌト答ヘタ處、英國大使ハ之ヲ諄トシ早速右ノ次第ヲ本國政府ニ電報スベシト退出シタ。越ヘテ一月十三日松平大使ハ「サイモン」外相ト會見シ意見ヲ交換シタガ、米蘇招請問題ニ關シ松平大使ヨリ當初本件ニ付話ノ出タ時、貴大臣ハ日本ノ同意ヲ先決問題トサレタ故、其通り之ヲ報告シタガ、其後日本政府ニ於テ此兩國ノ招請ヲ希望セヌコトガ明カト成ツタニ付テハ、英國ハ今尙ホ之ヲ主張スルノ意嚮アリヤ否ヤ承知シタイト聞タイ處、「サ」外相ハ總會ニ於ケル其演説ノ一節ヲ讀ミ、本件ニ關シテハ自分ハ試案トシテ話シタ積リデ、日本側ガ之ヲ好マズ聯盟國丈ニ限ラムトスルノモ相當ノ理由ハアルカラ、此點ハ聯盟側ニ於テモ強チ主張スル要ハアルマイトテ、同席ノ「カドガン」氏ニ向ヒ其意見ヲ求メタ。氏ハ此考案ハ調査委員會報告書ニ起因

セルモノト思ハルル旨ヲ述べタノデ、「サ」外相ハ「イマンス」議長ヤ「ドラモンド」事務總長ノ職責ニ干渉スル譯デハナイカ、此點ハ何トカナルダウト答ヘタ。次ニ和協委員會ノ權限ニ關シ松平大使ヨリ日本ノ立場ト主張ヲ種々説明シタラ「サ」外相ハ日本ガ同委員會ヲ全然其要ナシトテ拒絕スレバ、各國ノ感情ヲ害シ頗ル困難ナ立場ニ陥ルベキモ、之ヲ快ク受ケ容ルルニ於テハ、其權限ニ付今カラ明確ニ文句ヲ以テ定義ヲ下シ置カズトモ、狀況ノ變化ニ依リ如何様ニモ爲シ得ベク、要ハ聯盟トシテハ支那側デモ直接交渉ヲ受諾スルヲ要シ、又假リニ支那側之ヲ承知スルモ、其後ニ於テ果シテ妥結ニ達シ得ルヤ否ヤニ在ルガ、自分ハ之ヲ懸念シテ居ルト云フタカラ、松平大使ハ日本政府ハ決シテ和協委員會ヲ拒絕スルモノデハナイ、之ヲ受諾スルノハ明瞭ダガ、直接交渉ノ開カレタ後ニ干涉サレルノヲ好マヌノデ、又第三國ガ立入レバ支那側ハ之ノミニ頼リ到底妥協ニ達スル見込ハナイト答ヘタ。「サ」外相ハ頻リニ實際ノ手心ニ依ルノガ得策ダト繰返シ、強テ此際明確ニ規定セントスレバ、聯盟側及支那側ノ同意ヲ取付ケルコトガ困難ダト仄カシ、自分ハ日英關係ニ重キヲ置キ出來得ル限り努力ハスルガ、聯盟ニ對スル英國ノ立場モ日本デ充分考慮ニ入レテ貰ヒタイト釘ヲ差シタト仄聞スル。